

蒙古襲来絵詞を読みとく

橋本 雄（北海道大学）

発表要旨

鎌倉後期に起こった蒙古襲来(モンゴル戦争)に関する史料は、存外少ない。そのなかでも、その戦争に参加した肥後国(現・熊本県)御家人の竹崎季長{たけざきすえなが}が描かせたという「蒙古襲来絵詞」(宮内庁蔵)は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料として知られる。つまり、モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻は非常に重要な意味をもつ。

だが、この作品が現在の状態になったのは、江戸時代の寛政年間(19世紀初頭)の修理・成巻による。そして、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理では少なからぬ補筆が施されたとおぼしい。普通なら一つだけの「奥書{おくがき}」(巻末の作成趣意書)が二つも存在するほか、料紙の種類も一貫していないなど、謎だらけの絵巻である。

したがって、本作品を歴史研究の俎上にのぼせるためには、まず周到な史料批判が必要である。絵画作品とは言っても、本絵巻はもとより実景を描写したものではない。本作品の現状から、ナイーヴに歴史的事実を読み取ることも論外である。この絵巻を最大限活用するために、周到な史料批判が必要なゆえである。すなわち、本絵巻の成立にまつわる作成者の意図や目論見、原状の想像的復元など、近年のモンゴル戦争研究や絵巻そのものの研究の成果を踏まえて究明してみたい。

こうした作業により、モンゴル戦争の表象論への、汎アジア史的足がかりが得られれば幸いである。

略歴

1972年、東京生まれ。1995年、東京大学文学部卒業。2000年、同大学院博士課程単位取得退学。2004年、博士(文学)学位取得。

日本学術振興会特別研究員、九州国立博物館設立準備室、同学芸部研究員等を経て、現在、北海道大学大学院文学研究科准教授。

専門分野は、中世日本の国際交流史・文化史。

主な著作:『中世日本の国際関係』(吉川弘文館、2005年)、『中華幻想』(勉誠出版、2011年)、『偽りの外交使節』(歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2012年)、『“日本国王”と勘合貿易 なぜ、足利将軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか』(さかのぼり日本史:外交篇[7]室町、NHK出版、2013年)など。